

会議名	(社)農林水産技術情報協会(平成17年度 第6回) 民間部門農林水産研究開発功績者表彰事業 功績発表会
開催日時	平成17年11月25日(金) 13:30~16:30
開催場所	法曹会館 会議室(東京都千代田区霞ヶ関1-1-1)
主催者	農林水産省・(社)農林水産技術情報協会
参加人数(概数)	約120名
1. 会議の概要 (資料を別添)	<p>この事業は、主催者が生研機構、STAFFなどの協賛団体の協力・支援を受けて、民間部門の研究開発に顕著な功績・功労のあった個人またはグループを顕彰するものである。受賞課題は公募により、農林水産業と関連産業分野の基礎研究から応用・実用化まで幅広い領域の研究開発を対象とし、今年度は応募38件の中から審査委員会(藤巻宏委員長)の審査で選定された。功績発表会に先立って表彰式が行われ表彰状およびトロフィーが贈呈された。</p> <p>(農林水産大臣賞ほか各種受賞9事例の中から畜産関連の3事例について報告するが、この功績の内容については追って主催者の機関誌“農林水産技術研究ジャーナル”の記事として掲載されるものと思われるので参照されたい)。</p> <p>農林水産大臣賞；</p> <ul style="list-style-type: none"> ・低温環境下での全自動チキン処理加工システムの開発 (株)前川製作所(児玉 龍二ほか6名) <p>チキン2次解体工程は人手の器用さに依存した熟練作業で、自動化は困難とされていた。また最近では職人の確保が困難な状況にあり、人手依存型からの脱却が業界としての最大の課題であり、自動化の要望が極めて強かった。そこで、チキン2次解体工程の主要な3工程(大バラシ工程、胸肉脱骨工程、腿肉脱骨工程)をロボティクスやNC制御、各種センシング技術等の先端技術を駆使して自動化し省人化を実現した。この開発によりチキン2次解体主要工程の低温処理加工が可能となり、HACCPにも対応でき、高品質かつ高鮮度なチキンミートを供給できる生産システムの構築が可能となった。普及状況として国内外で、大バラシ工程(商品機種名;ハービダス)、胸肉脱骨工程(イ ルダス)、腿肉脱骨工程(トリダス)の3機種が稼働中で、トリダスは市場占有率100%でチキン工場では不可欠なものになっている。</p> <p>農林水産技術会議会長賞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鶏用多種混合オイルアジュバンドワクチンの開発 (財)化学及血清療法研究所(本田 隆ほか2名) <p>従来の鶏不活性化ワクチンは頻回注射が必要で、手間と鶏へのストレスが問題であった。受賞対象のアジュバンドワクチンは、軽質流動パラフィンと界面活性剤を用い、数種混合が可能で、抗体価が1年間持続する。すでに10種類の製剤を市販し市場占有率が50%に達している。これにより、ニューカッスル病、鶏伝染性気管支炎、伝染性コリーザ等の防圧に貢献している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・低アレルゲン化食肉製品および食物アレルゲン検証技術の研究開発 日本ハム株式会社中央研究所アレルギー研究グループ(代表 森松 文毅) <p>アレルギーを惹起しない良質タンパク食品の供給と現場でのアレルゲン検出手法が要望されていた。これに対し、鶏卵、牛乳成分等の食物アレルゲンを高感度に検出する化学発光エライザ方と品質保証システムを開発し、低アレルゲン性食肉製品を開発・上市した。また、食品の品質管理に採用可能な、食物アレルギー原材料を特定・定量できるキット類を開発・上市した。</p>

	<p>社会のニーズにあった応用研究とそれによる食肉製品・キットの開発と普及が評価された。</p>
<p>2．今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p>	<p>・製パン性に優れる春まき小麦「春よ恋」の育成・普及 (農林水産大臣賞受賞：ホクレン); 堆肥施用・麦稈利用・ふすま等副産物の飼料利用など畜産との関係が深い小麦の新品種を育成・普及した功績が表彰されたもので、これまで国内育成が遅れていた待望の新品種であり、価格的には不利な国産小麦が、倒伏防止の肥培管理が難しいようであるが、さらに畜産からの堆肥を活用した有機栽培により消費者の支持を得て作付けを伸ばし、耕畜連携により有機畜産物の生産に結び付くことを期待したい。</p>
<p>3．その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>・天敵昆虫等生物的資材の利用による生物的資材の利用による生物的防除システムの開発((社)農林水産先端技術産業振興センター会長賞受賞、アリストライフサイエンス株); 5種類の寄生蜂、8種類の捕食性天敵、3種類の微生物農薬、2種類の受粉昆虫の開発、農薬登録が評価されたものであるが、今後このような総合的害虫管理(IPM)技術の野外活用が活発になると予測されるので、ミツバチと養蜂に与える影響について検討する必要があるのではないか。</p>
<p>4．今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>同類事業が関連団体で強力に取り上げられていることをよく認識し、情報の収集と交換に努め、万が一にも重複採択などを行わないように十分注意する必要がある。</p>
<p>5．報告者</p>	<p>針生 程吉</p>